

研究課題：WEB版がんよろず相談システムの構築と活用に関する研究

課題番号：H19-がん臨床-一般-005

研究代表者：静岡県立静岡がんセンター 総長 山口 建

1. 本年度の研究成果

- 1) WEB版がんよろず相談Q&Aの構築と活用に関する研究は、がん患者や家族の多様な悩みや負担を軽減し、患者・家族が他のがん体験者の悩みや負担を共有し、医療・行政関係者がそれを認識し、さらに、相談支援センターの担当者などが参考にすることを目的として進められた。とくにがん患者や家族の暮らしに関する悩みや負担への助言を作成している。患者・家族にとって悩みや負担の解決には、相談支援センターなどでの対話型の相談が最も有効であることは言うまでもない。しかし、それが実現できない場合やその前段階においては、医療機関などが作成した一方向的な文書類とは異なり、利用者指向型の情報ツールとしての本システムが、暮らしに関する悩みや負担の解決に役立っている。
- 2) 今年度は、全国の医療相談担当者、研究者、患者団体の意見やサイトに配置したアンケート結果に基づき、提供する情報、サイトの構成やレイアウトを改良した。
- 3) 改良の第一の点は、受診時、診断時、治療、治療終了後、緩和ケアなど、「経過に沿った悩み」のタブを作成し、病気の時期に応じた悩みと助言を探しやすくしたことである。
- 4) 改良の第二の点は、5大がんの部位別悩みデータベースを構築し、疾患別のがん体験者の悩みや負担を共有し、助言を閲覧できるようにしたことである。
- 5) 利用状況の分析では、昨年度より増加し、毎月3万5千件程度の利用があった。
- 6) 利用者の検索パターンでは、病名や治療名、副作用症状や機能障害名などの医療情報に関するキーワードに基づくものが多いが、キーワードが漠然と広範囲にわたるなど、患者や家族はインターネットを用いた情報検索に不慣れである状況が推測された。
- 7) 漠然とした検索キーワードで情報を探す人が多い中で、患者や家族が抱える悩みや問題の背景や要因を整理し、情報提供のあり方を検討した。その上で、患者や家族の暮らしに密接に関連する、“患者として診療を受ける”、“食事・排泄・睡眠・性生活などの日常生活を中心とした生理的欲求の充足”、“医療者や家族など周囲の人々との関係性（コミュニケーション）”、“就労や経済面などの社会的問題”、“不安などのこころの問題”という五つの側面に整理して情報提供を行うことが効率的だと考えた。
- 8) がんよろず相談Q&A第6集として“乳がん編③”を作成した。

2. 前年までの研究成果

- 1) がん患者、家族、がん診療連携拠点病院相談支援センターの担当者、社会の人々を対象に、医療情報、心のケア、暮らしの支援などに関する情報提供を目的としたウェブサイトとしてWEB版がんよろず相談を開設した。
- 2) その内容には、がん患者や家族の悩みや負担とその解決に向けての助言、“がんよろず相談Q&A集”、“学びの広場”、“地域のがん診療機能と静岡県の市町が実施する医療福祉サービスの窓口リストなどが含まれる。
- 3) がん患者の悩み・負担の分類法として“静岡分類”を確立し、すでに実施した全国調査“がん体験者の悩みや負担等に関する実態調査”で収集された2万7千件、静岡がんセンターがんよろず相談記録5万6千件と、WEB版がんよろず相談へのアクセス42万8千件を、科学的に比較分析することを可能とした。

- 4) 42万8千件のアクセスについて、静岡分類に基づく悩み・負担を分析すると、“症状・副作用・後遺症“に関するものが約半数を占め、”診断・治療”、”不安など心の問題”がそれに次いだ。同じ分類で、アンケート調査2万7千件、対面・電話によるがんよろず相談5万6千件と比較すると、そのパターンには大きな差異が認められた。
- 5) 患者・家族への情報提供冊子である“学びの広場”について、“緩和ケアとは”、“痛みをやわらげる方法”、“患者・家族のコミュニケーション”、“がんと上手につきあう方法”の4種を作成し、1万4千部を全国の拠点病院などに配布し、WEB版がんよろず相談にも掲載した。また、がんよろず相談Q&A第4集、第5集として“乳がん編”を作成し、全国の拠点病院などに配布した。
- 6) 全国の拠点病院相談支援センター担当者や患者会・患者支援団体などを対象に、WEB版がんよろず相談の利用法を説明する機会を持った。

3. 研究成果の意義及び今後の発展性

- 1) WEB版がんよろず相談システムは、がん患者や家族の悩みや負担の軽減を図るツールである。利用者は、患者・家族と共に、拠点病院の相談支援センターの担当者や行政の医療・福祉・介護担当者、さらには、様々な社会の人々が含まれる。本システムで得られた情報によって、利用者は、自分一人ではなく、他の患者・家族と悩みや負担を共有し、また、医療従事者や行政担当者は、その悩みや負担の実態を知り、より効果的な支援を行うことができる。
- 2) がん医療の分野では、入院期間の短縮化がすすみ、通院治療も増加している。がん患者は、「患者」として治療や定期通院を続けるだけでなく、自宅や地域で「暮らす人」でもある。そこで、情報提供やこころのケアの実施にあたっては、「患者」を中心に据えるのではなく、「普通に暮らす人、そして病を抱えて社会生活を送る人」という視点で考えていく必要がある。本研究の成果は、「暮らし」の視点に基づく患者・家族ケアの実践に有用である。
- 3) 患者や家族は、多様な悩みや負担感を抱えながら、問題を整理できないまま情報を探す傾向がある。本研究は、インターネット媒体による情報提供における、より効果的な情報検索を進める手がかりになる。

4. 倫理面への配慮

- 1) 本研究においては、情報提供手法が研究対象であり、患者あるいは一般市民に危険が及ぶ状況は想定されていない。

5. 発表論文

雑誌

外国語

1. [Nagai Y](#), et al., The influence of informing patients about cancer on their quality of life in gastric, lung, and colorectal cancer patients in Japan, *Qual. Life Res*, 18:A96, 2009.
2. Takeuchi H, [Tashiro H](#), et al., Clinicopathological characteristics of recurrence more than 10 years after surgery in patients with breast carcinoma, *Anticancer Res*, 29:3445-3448, 2009.
3. Shiki N, [Ohno Y](#), et al., Unified modeling language (UML) for hospital-based cancer registration processes, *Asian Pacific J. Cancer Prev*, 9:118, 2009.

日本語

1. [山口建](#)、堀内智子、がん診療連携拠点病院の現状と課題、保健医療科学、57：318-326、2009
2. [山口建](#)、多職種チームの医療の実践、*Oncology Network*、2：3、2009

3. 山口建、がん医療現場でのQuality improvementを考えるー患者参加型医療への対応ー、安全医学、5:5-11、2009
4. 濃沼信夫、がん検診の現状と問題点、日本医師会雑誌、138:43-46、2009
5. 濃沼信夫、胃癌撲滅戦略による経済効果、Helicobacter Research、13: 380-384、2009
6. 濃沼信夫、分子標的薬の医療経済、日癌治、44:232、200
7. 濃沼信夫、胃癌の医療経済、The Forefront、5、(印刷中)
8. 大友理恵子、柴光年、他、化学療法中の食欲不振患者への食事援助ー化学療法食を考案してー、全自病協雑誌、48: 116-119、2009
9. 松山円、大曲睦恵、石田裕二、他、病児のきょうだい支援ー看護支援の実際 自宅から離れた場所で治療を受ける患児のきょうだいへの説明ー、小児看護、32: 1316-1322、2009
10. 佐々木常雄、生と死を見つめて、Modern Physician、29: 1501-1504、2009
11. 佐々木常雄、終末期における心のバトン、訪問看護と介護、14: 366-371、2009
12. 佐々木常雄、医療のピットフォール がん緩和医療での告知とインフォームドコンセント (解説)、治療学、43: 441-443、2009
13. 小西敏郎、佐々木常雄、アンケート調査からみた再発・進行がん患者の疼痛管理における主治医の役割の重要性、癌と化学療法、36: 453-460、2009
14. 佐々木常雄、都道府県がん・地域がん診療連携拠点病院、日本臨床、67: 544-549、2009
15. 中村吉昭、大野真司、外来がん化学療法におけるチーム医療と外科、臨床外科、64:1225-1233、2009
16. 上田由喜子、長井吉清、他、がん患者の希望に関する意識構造、日本健康科学学会誌、25: 212-212、2009
17. 長井吉清、他、病名告知のクオリティオブライフへの影響、癌の臨床、55: 389-393、2009
18. 東さやか、田伏克惇、TS-1 適正使用確認システムの構築とその応用、癌と化学療法、第 37 卷、(印刷中)
19. 吉田隆子、味覚の発達と食行動、日本生理人類学会誌、14:24-25、2009
20. 小池眞規子、病む子どもの傍らで、臨床心理学、9: 341-345、2009
21. 清水佐知子、大野ゆう子、他、リネンRFIDタグによる患者安全・見守りシステムの実験的検討、生体医工学、47:139、2009

書籍

日本語

1. 山口建、がんよろず相談 (相談支援センター) の取り組みと役割、がん医療入門、朝倉書店、東京、218-225、2009
2. 山口建、「がんの社会学」を目指して、医の倫理・シリーズ `よい医師になる`、日本医学出版、東京、93-111、2009
3. 山口建、あと13年。がんの2015年問題にどう立ち向かうか、日本医療情報出版、東京、印刷中
4. 山口建、他 (「がんの社会学」に関する合同研究班)、「がんよろず相談Q&A第5集 乳がん編②、静岡がんセンター編集、2009
5. 山口建、他 (「がんの社会学」に関する合同研究班)、「がんよろず相談Q&A第6集 乳がん編③、静岡がんセンター編集、(印刷中)
6. 山口建、がんの社会学と患者支援、がん看護BOOKS がん看護研修マニュアル、静岡がんセンター編集、南江堂、東京、(印刷中)
7. 山口建、がん対策の総合的戦略ー予防・検診・受診・情報ー、がん看護BOOKS がん看護研修マニュアル、静岡がんセンター編集、南江堂、東京、(印刷中)
8. 濃沼信夫、大腸癌治療の費用効果、大腸疾患NOW2010、日本メディカルセンター、東京、(印刷中)
9. 永井宏和、インフォームドコンセントのための図説シリーズ「悪性リンパ腫」改訂版、病気のひろがり (臨床病期)、堀田知光 (編)、医薬ジャーナル、大阪、2009
10. 永井宏和、現場で役立つ血液腫瘍治療プロトコール集、低悪性度非ホジキンリンパ腫、直江知樹 (編)、医薬ジャーナル、大阪、2009
11. 永井宏和、EBM血液疾患の治療 2010-2011、びまん性大細胞型B細胞性リンパ腫は、胚中心B細胞 (GCB) と活性型B細胞 (ABC) 型で治療方針をかえるべきか?、金倉謙 (編)、中外医学社、東京、2009
12. 柏木雄次郎、がんの初期から始まる緩和ケア:がんを治すチカラ、大阪府立成人病センター (編)、毎日新聞社、東京、2009
13. 柏木雄次郎、がんの痛みを和らげる (疼痛緩和):がんを治すチカラ、大阪府立成人病センター (編)、毎日新聞社、東京、2009
14. 柏木雄次郎、がん患者さんのメンタルケア:がんを治すチカラ、大阪府立成人病センター (編)、毎日新聞社、東京、2009
15. 吉田隆子、子どもたちに生きる力を、カラダの百科事典、日本生理人類学会[編]、丸善株式会社、東京、116-120、2009
16. 小池眞規子、人生半ばで大病に罹ること:成人発達臨床心理学一個と関係性からライフサイクルを観るー、岡本祐子 (編) ナカニシヤ出版、京都、(印刷中)

6. 研究組織

研究者名	②分担する究項目	③最終卒業校・卒業年次・学位及び専攻科目	④所属機関及び現在の専門(研究実施場所)	⑤所属機関における職名
山口 建	WEB版がんよろず相談システムに関する研究	慶應義塾大学 医学部 昭和49年卒 医学博士 内科学	静岡県立 静岡がんセンター 腫瘍内分泌学 (所属施設同じ)	総長
濃沼 信夫	cost of cancer に関する研究	東北大学 医学部 昭和50年卒 医学博士 医療管理学	東北大学 大学院 医学系研究科 (所属施設同じ)	教授
山口 直人	WEB版がんよろず相談システムで得られる情報の疫学的解析に関する研究	慶應義塾大学 医学部 昭和53年卒 医学博士 がん情報学	東京女子医科大学 医学部 衛生学公衆衛生学 第二講座 (所属施設同じ)	主任教授
澤田 茂樹	肺癌術後 QOL 向上に関する研究	岡山大学 医学部 平成2年卒 医学博士 呼吸器外科	独立行政法人 国立病院機構 四国がんセンター 呼吸器外科 (所属施設同じ)	医師
柴 光年	進行期悪性腫瘍患者の在宅医療支援に関する調査研究	千葉大学 医学部 昭和50年卒 医学博士 呼吸器外科学	国保直営総合病院 君津中央病院 呼吸器外科 (所属施設同じ)	副院長
谷尾 吉郎	合併症を有する肺がん患者のQOL	大阪大学大学院 医学研究科 昭和57年 医学博士 内科学	地方独立行政法人 大阪府立病院機構 大阪府立急性期・ 総合医療センター 内科 (所属施設同じ)	主任部長
加治 正英	胃がん患者の術前・術後のQOL向上に関する研究	金沢大学 医学部 平成元年卒 医学博士 外科学	富山県立中央病院 医療局 外科 (所属施設同じ)	部長
望月 泉	消化器癌術後のQOLを向上させることを目的とした支援療法等のあり方に関する研究	東北大学 医学部 昭和53年卒 医学博士 消化器外科	岩手県立中央病院 外科・消化器外科 (所属施設同じ)	副院長兼 消化器外科長兼 外科長
江上 格	WEB版がん情報提供とよろず相談システム開発に関する研究	日本医科大学 大学院 昭和47年卒 医学博士 外科学	公立阿伎留医療 センター 診療部 回復期リハビリテ ーション担当 (所属施設同じ)	部長

小切 匡史	消化器がん手術後、血液がん造血幹細胞移植後のがん生存者とその家族に対する支援療法等のあり方に関する研究	京都大学 医学部 昭和 54 年卒 医学博士 外科学	市立岸和田市民病院 (所属施設同じ)	副院長兼 外科部長
土屋 嘉昭	消化器がん治療後患者および家族に対する支援に関する調査研究	新潟大学 医学部 昭和 53 年卒 医学博士 消化器外科学	新潟県立 がんセンター 新潟病院 外科 (所属施設同じ)	部長
田中屋 宏爾	がんハイリスク者の カウンセリングに関する研究	岡山大学大学院 医学専門課程 平成 5 年卒 医学博士 医学専門課程	独立行政法人 国立病院機構 岩国医療センター 診療部 (所属施設同じ)	統括診療 部長
謝花 正信	放射線治療治療を施行する過程でのがん患者の QOL を向上させることを目的とした支援療法等のあり方に関する研究	鳥取大学 医学部 昭和 53 年卒 医学博士 放射線科	松江市立病院 診療局 (所属施設同じ)	診療部長
原 信介	外来化学療法を受ける患者の QOL を向上させる支援療法のあり方に関する研究	長崎大学 医学部 昭和 54 年卒 医学博士 外科学	佐世保市立総合病院 外科 (所属施設同じ)	管理診療 部長
石田 裕二	こどもおよびその家族を中心とした家族支援に関する研究	自治医科大学 医学部 平成 4 年卒 学位なし	静岡県立 静岡がんセンター 小児科 (所属施設同じ)	部長
堀越 泰雄	小児がん患者の合併症の早期発見と対処方法についての研究	浜松医科大学 昭和 59 年卒 小児科学	静岡県立こども病院 血液管理室 (所属施設同じ)	室長
佐々木 常雄	がん患者の化学療法中、後における社会的、心理的支援ツールに関する調査研究	弘前大学 医学部 昭和 45 年卒 医学博士 内科学	がん・感染症センター 東京都立駒込病院 化学療法科 (所属施設同じ)	院長
永井 宏和	化学療法後の身体的・心理的障害に関する研究	金沢大学 医学部 昭和 60 年卒 医学博士 血液腫瘍学	独立行政法人 国立病院機構 名古屋医療センター 臨床研究センター 血液・腫瘍研究部 (所属施設同じ)	部長
山本 英彦	WEB 版がんよろず相談で行う「がん治療費概要」検索システムの構築	熊本大学 昭和 53 年卒 医学博士 呼吸器内科(肺癌)	飯塚病院 呼吸器内科 (所属施設同じ)	副院長兼 呼吸器内科部長

関口 勲	WEB版がんよろず相談システムを活用した栃木県立がんセンターがん情報、相談支援センターの運営についての研究	島根医科大学 昭和57年卒 医学博士 婦人科腫瘍	栃木県立がんセンター 婦人科 (所属施設同じ)	第1病棟 部長
大野 真司	乳がん患者と家族の支援ツールに関する調査研究	九州大学 医学部 昭和59年卒 医学博士 乳腺外科学	独立行政法人 国立病院機構 九州がんセンター 乳腺科 (所属施設同じ)	医長
長井 吉清	病名告知のQOLへの影響	東北大学大学院 医学研究科 昭和57年卒 医学博士	宮城県立がんセンター 研究所 がん医療情報・緩和学部 (所属施設同じ)	部長
蓮見 勝	がん外来診療における心のケア・医療相談に関する研究	生理学 群馬大学大学院 平成16年卒 医学博士 泌尿器科	群馬県立がんセンター 泌尿器科 (所属施設同じ)	部長
渡辺 敏	緩和医療推進を企図した広報活動に関する研究	北海道大学 医学部 昭和50年卒 医学博士 緩和医療学	千葉県がんセンター 緩和医療科 (所属施設同じ)	部長
坂井 隆	がん患者のQOLを向上させるための地域連携緩和医療の検討	三重県立大学 医学部 昭和45年卒 医学博士 胸部外科学	独立行政法人 国立病院機構 三重中央医療センター 呼吸器外科 (所属施設同じ)	院長
山下 浩介	がん生存者のQOL向上に関する研究	防衛医科大学 昭和56年卒	社会医療法人北斗 北斗病院 診療部 在宅医療科 (所属施設同じ)	部長
須賀 昭彦	がん患者に対する緩和・支持治療のあり方に関する研究	放射線医学 筑波大学 医学専門学群 平成4年卒 医学博士 緩和医療学	静岡済生会総合病院 緩和医療科 (所属施設同じ)	科長
柏木 雄次郎	地域連携を通じた在宅緩和ケアの支援策に関する調査研究	佐賀医科大学 昭和60年卒 医学博士 精神医学	大阪府立 成人病センター 心療・緩和科(腫瘍精神科) (所属施設同じ)	主任部長
田伏 克惇	オーダーリング機能を利用したシステムでの抗がん剤の標準用量への是正の試み	和歌山県立医科大学 昭和46年卒 医学博士 外科学	独立行政法人 国立病院機構 大阪南医療センター 診療部 (所属施設同じ)	統括診療部長

金岡 俊雄	泌尿器がん手術後の QOL に影響を及ぼす因子の研究	京都大学医学部 大学院 昭和 62 年卒 医学博士 外科系	日本赤十字社 和歌山医療センター 泌尿器科 (所属施設同じ)	副部長
加藤 誠	小児がんの子供を持つ親への心理的サポートに関する研究	千葉大学医学部 昭和 47 年卒 医学博士	成田赤十字病院 (所属施設同じ)	病院長
龍沢 泰彦	がん患者の家族の心のケアに関する研究	脳神経外科 金沢大学大学院 医学研究科 平成 3 年卒 医学博士	石川県済生会 金沢病院 外科 (所属施設同じ)	診療部長
高橋 郁雄	進行再発消化器がん患者の治療と病状把握の実態に関する研究	九州大学 医学部 昭和 63 年卒 医学博士	松山赤十字病院 外科 (所属施設同じ)	第 2 外科 部長
野口 和典	肝癌治療における患者・家族の支援に関する研究	消化器外科 固形癌科学療法 久留米大学 医学部 昭和 53 年卒 医学博士	大牟田市立総合病院 研究研修部、 診療部内科 (所属施設同じ)	副院長 研究研修部長 内科部長
渡辺 洋一	肺癌患者の QOL 向上に対する呼吸器インターベンションおよび種々の在宅療法支援の果たす役割に関する研究	内科学・消化器病学 鳥取大学 医学部 昭和 51 年卒 医学博士	岡山赤十字病院 呼吸器内科・ 緩和ケア科 (所属施設同じ)	副院長兼 呼吸器内科部長兼 緩和ケア科部長
井上 賢一	乳癌患者の薬物療法における、サポートに関する研究	呼吸器内科学 埼玉医科大学 大学院 昭和 63 年卒 医学博士	埼玉県立 がんセンター 乳腺腫瘍内科 (所属施設同じ)	科長兼 部長
奥原 秀盛	緩和ケア病棟に入院中の患者の家族支援に関する研究	腫瘍内科学 琉球大学医学部 保健学研究科 平成 5 年卒 保健学修士 保健学	静岡県立大学 看護学部 (所属施設同じ)	准教授
田代 英哉	WEB 版がんよろず相談システムの活用に関する研究	九州大学 医学部 昭和 53 年卒 医学博士	大分県立病院 外科 (所属施設同じ)	副院長兼 がんセンター所 長兼 外科部長
安達 勇	がん緩和医療の継続としての緩和医療外来のあり方に関する研究	外科 新潟大学 医学部 昭和 43 年卒 医学博士	静岡県立 静岡がんセンター 緩和医療科 (所属施設同じ)	部長

大田 洋二郎	がん患者歯科医療連携推進のためのソフト開発に関する研究	北海道大学 歯学部 昭和 61 年卒 歯科・口腔外科	静岡県立 静岡がんセンター 歯科・口腔外科 (所属施設同じ)	部長
田沼 明	がん患者における機能障害・能力低下およびそれらに対するリハビリテーションの知識の普及に関する研究	慶應義塾大学 医学部 平成 8 年卒 医学博士 リハビリ テーション医学	静岡県立 静岡がんセンター リハビリテーション科 (所属施設同じ)	部長
石川 睦弓	化学療法を受けるがん患者を支援する情報提供ツールのあり方に関する研究	筑波大学大学院 教育研究科 平成 12 年卒 カウンセリング修士 がん看護学	静岡県立 静岡がんセンター 研究所 患者・家族支援研究部 (所属施設同じ)	部長
吉田 隆子	がん患者の QOL 向上のための小児期からの食育のあり方に関する研究	日本女子大学 家政学部 昭和 44 年卒 家政学士 食物栄養学・ 栄養教育学	日本大学 短期大学部 食物栄養学科 (所属施設同じ)	教授
小池 眞規子	がん患者の QOL 向上に関する心理学的研究	筑波大学大学院 教育研究科 平成 3 年卒 教育学修士 臨床心理学	目白大学 人間学部 心理カウンセリング学科 (所属施設同じ)	教授
大野 ゆうこ	QOL に基づくがん患者支援療法等の分類および効果評価に関する研究	東京大学大学院 医学系研究科 昭和 60 年卒 医学博士 医学意思決定 (計量医学)	大阪大学大学院 医学系研究科 総合ヘルスプロ モーション科学講座 (所属施設同じ)	教授
青木 和恵	がん患者のセルフコントロールの確立を目的とした専門ケアの提供に関する研究	金沢大学大学院 医学系研究科 平成 15 年卒 保健学修士 保健学専攻 創傷ケア領域	静岡県立 静岡がんセンター 看護部 (所属施設同じ)	看護部長
稲野 利美	がん患者の QOL 向上のための栄養・食事相談のあり方に関する研究	共立女子大学 家政学部 昭和 61 年卒 学位なし	静岡県立 静岡がんセンター 栄養室 (所属施設同じ)	室長
高田 由香	がん患者・家族の QOL 向上を目的とした総合相談や情報提供のあり方に関する研究	日本女子大学 文学部 昭和 62 年卒 学士 社会福祉	静岡県立 静岡がんセンター 疾病管理センター よろず相談 (所属施設同じ)	主幹
大曲 睦恵	こどものケアに関する相談支援のあり方の研究	Mills 大学院 平成 15 年卒 修士 チャイルド・ライフ	静岡県立 静岡がんセンター 研究所 看護技術開発研究部 (所属施設同じ)	技師

